

介護職の魅力を発信する効果的な活動についての調査 — 介護の仕事と社会変化の関係性からの一考察 —

戸館 康秀 医療法人やわらぎ会 介護老人保健施設やわらぎ苑上磯

キーワード 介護職の魅力、人材不足、体験活動、学校教育、現代社会

I 研究背景と目的

厚生労働省による「介護人材確保に向けた取り組み」にあるよう、2025年度末に必要な介護人材数は約245万人となり、年間6万人程度の介護人材を確保する必要があると推計されている。しかし、少子化の影響による介護職の担い手の減少や介護職に対するイメージの低迷による人材不足は介護福祉の現場において深刻な課題となっている。介護人材確保と介護職の魅力向上においては、「学生やその保護者、進路指導担当者等への介護の仕事の理解促進」、「介護を知るための体験型イベントの開催」に加え、「若者、子育て層、アクティブシニア層に対する介護職の魅力などの発信」が「総合的な介護人材確保対策」として示されており、「介護の日・福祉人材確保重点実施期間」からも確認できるよう、各都道府県では多種多様な取り組みが実施されている。

筆者が在住する北海道南西部（以下、道南）においても、介護人材確保や介護職の魅力向上を目的とした取り組みは実施されているが、具体的な効果を示している調査報告は確認できていない。また、現在の介護人材の状況を踏まえ、日本介護福祉士会倫理基準（行動規範）の「地域福祉の推進」、「後継者の育成」

を多角的な視点でとらえると、介護福祉士自らが地域や多様な人材に向けてその専門性を発信していくことが求められているのではないかと考える。

本研究は、介護職の担い手を増やすための第一段階ともいえる「介護職の魅力の発信」について調査を行うことで、より効果的な発信方法を考察し、介護人材確保に繋がる有効的な取り組みを見出すことを目的とした。

II 研究方法

1. 研究方法の検討

先に述べたように、「介護の日・福祉人材確保重点実施期間」での各都道府県の取り組みは、事業所説明会、記念講演会やトークイベント、映画上映会等様々であり、北海道では4都市でトークイベントとバスツアーが開催されている。介護職の魅力向上と発信についての実施内容を確認することはできるが、その効果を調査、考察する研究は少ないと判断し、本研究は実践活動から得たデータを基に有効的な取り組みを探索する研究に位置付けて進めることとした。

また、道南にある15の介護老人保健施設（以下、道南老健）では、各施設が連携でき

るネットワークが形成されている。筆者が所属する介護リーダー会は道南老健に勤務する介護主任や介護リーダーを参加対象として構成されており、定例会、外部講師を招いた多職種参加型研修会の企画、介護福祉士養成施設の教員との意見交換会等の開催を主軸に活動を行っている。介護職の魅力発信に向けた取り組みの有効性を調査するには、若者や子育て層等、より多くの層のデータ収集が必要になる。そこで、施設単体と比較しても規模が大きい活動を定例的に実施している介護リーダー会を通じて調査を進めることで、より研究の成果が期待できると判断した。

2. 研究内容、及び研究期間と対象

文部科学省の「体験活動の教育的意義」で「今後の教育において重視されなければならないのは、ヒト・モノや実社会に触れ、かわり合う「直接体験」である」と示されているように、「主体的」に「体験する」活動が、魅力を発信する効果を増大させ、且、介護職に対する興味関心を促進させるのではないかと推測。これらを踏まえ、2019年4月～11月の期間で下記の取り組みを実施。

1) 地域の介護人材不足の状況把握と課題の明確化(2019年4月)

全国的に介護人材の確保が必要なことは明確であるが、より地域の実態に即した調査を進めるにあたり、先ずは道南の中核市であるA市の介護人材の不足状況の確認を実施。介護リーダー会参加者が介護職の魅力発信する必要性を共通の認識とするべく活動目標を設定した。

2) 高校生以上の学生が抱く介護職の魅力の調査(2019年9月)

就職、または進学を間近に控える高校生以

上の学生が、介護職の魅力をどのように考えているかを、学生参加型の研修会の企画を通じて調査。調査方法は介護業務が一覧となって表記されている選択式アンケート用紙を用いて行い、A市を中心とした道南に在住する介護職に興味がある、または介護職を目指している高校生以上の学生を対象とした。尚、研修会の内容としては、従来介護リーダー会で企画していた道南老健に勤務する職員のみを参加対象とした多職種参加型の研修会に学生を加えることで、学生が抱える就職や進学についての悩みや不安を実際に働く職員へグループワークを通じて確認できる目的も持ち合わせた。

3) 小学生に対する介護職の周知と取り巻く家族構成の把握(2019年9月)

社会環境の変化に伴う核家族化の影響もあり、子どもと高齢者との関わりは希薄になっていると推測される。このような状況のなかでは、介護という職業をイメージする以前に、「老化」や「障がい」の理解が得られず、生活に支援を要する方に対する「思いやりの心」が培われないのではないかと推測される。以上を踏まえ、A市で開催される小学校3～4年生を対象とした仕事体験イベント「キッズタウン」に介護のお仕事体験ブースを出展。職業がより具体的にイメージとして形成されてくる子ども、特に児童期の小学生に対し、介護職を体験的に周知すると同時に、体験の満足度と高齢者との実際の関わりについてインタビュー調査を実施。尚、体験内容は、介護が必要な高齢者に扮した職員に対し、介護福祉士として通所施設に勤務する職員の想定である小学生が、介護予防体操・上着の着衣、車いすへの移乗・車いす移動介助等の一連の介護業務を疑似体験する。

4) 地域の方が抱く介護職のイメージ調査 (2019年11月)

介護職に対するマイナスイメージが先行する現状を考慮し、地域の方が抱く介護職のマイナスイメージとプラスイメージを調査すると同時に、介護職に興味関心を示すきっかけをつくる活動を実施する必要があると考える。これらを踏まえ、A市の介護福祉士養成施設主催の大型書店で開催される一般来場者を対象とした多職種が参加する「福祉イベント」に介護ブースを出展し、介護職の魅力向上と周知を目的とした体験コーナーと作品作りを実施(福祉イベントは2日間で開催されるが、介護ブース出展は1日のみ)。作品作りでは、介護職のプラスイメージとマイナスイメージを「葉」に見立てた用紙に記入し、枝のイラストに貼っていく「介護の仕事の魅力の木」を作製。葉に記入されたフレーズをカテゴリー別に分類分けしてイメージの調査を行った。尚、プラスイメージは「緑の葉」で2枚、マイナスイメージは「落ち葉」で1枚の記入とした。同時に企画した体験コーナーでは、車いすに乗った来場者を移動介助し会場内を回することで、些細な声掛けの重要性を体感してもらう内容とした。

また、より一般来場者に興味を示してもらえるよう、A市に隣接するB市のご当地キャラクターに車いす移動介助の体験の協力を依頼し、介護ブースへの興味関心の促進と満足度向上を図る活動を行った。

3. データ収集方法及び分析方法

選択式アンケート調査で得られたデータは単純集計にて分析し、その他インタビュー調査や作品作りで得られたデータは類似カテゴリー別に分類分けし解析を行った。

4. 倫理的配慮

調査対象者へ本研究の目的を文書及び口頭にて説明し、アンケート用紙等の回収した情報は本研究以外では使用しないことで同意を得た。また、各イベント関係団体にも調査目的を説明し情報の活用について同意を得た。

Ⅲ 研究結果

1. 地域の介護人材の不足状況

A市所在の介護保険サービスを実施する事業所を対象に行った「介護人材の確保・定着に関する実態調査」によると、66.7%の事業所が介護職不足という結果であった。さらに、不足している理由では92.7%の事業所が「採用が困難である」と回答しており、「必要な人材を速やかに採用できているか」の項目では、施設系サービスが「できている」の割合が最も低い9.6%であった。

介護労働安定センターによる「平成30年度介護労働実態調査 事業所における介護労働実態調査 結果報告書」の「職種別の過不足状況」では、介護職が不足していると感じる事業所が69.2%となっている。

地域の介護人材状況は全国的な状況と比較しても相違なく不足していることが把握できたため、介護職の魅力を発信する必要性は明確であった(図1)。よって、介護リーダー会の活動は「介護人材確保と介護職の魅力を発信する」を目標としていくことで合意した。

2. 高校生以上の学生が抱く介護職の魅力

研修会には、高校生以上の学生41名(介護福祉士養成施設の学生37名、高校生4名)、道南老健に勤務する職員64名(介護職37名、

看護職9名、リハ職4名、相談職4名、栄養職1名、事務職9名)、合計105名の参加があった。

介護職を目指す、または興味がある学生が抱く介護職の魅力についてのアンケート結果(回収率90%)では、介護業務の分類での高値が「コミュニケーション」の16%であった。他の分野では突出した差が見受けられなかったが、生活支援の分野である「食事、排せつ、入浴、移動・移乗、整容」を総合すると27%の学生が直接的な関わりに魅力を感じるという結果であった(図2)。尚、同様のアンケート内容は職員も対象としており、学生同様「コミュニケーション」が19%と高値であった(図3)。

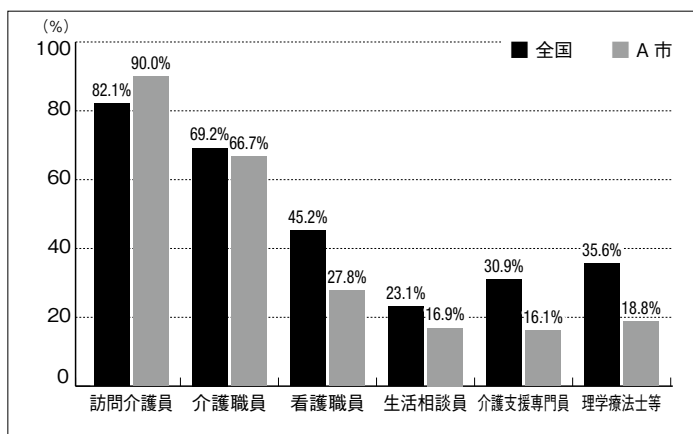
グループワークでは学生から「仕事をされていて大変なことは」や「利用者との関わりで難しい点は」等の率直な疑問が多く飛び交っていた。これらの疑問に対し職員は「こちらも笑顔をもたえる仕事」や「自立に向かう過程で喜びを共有できる仕事である」という説明が成されており、学生からは「直接働く職員と話ができてよかった」「将来働く時の不安が少し減った」等の意見が聞かれていた。

小学生の介護職の

3. 仕事体験に対する満足度と世帯の状況

キッズタウン参加の小学生は

図1 全国とA市を比較した職種別の不足状況



出典：A市「介護人材の確保・定着に関する実態調査」と介護労働安定センター「平成30年度介護労働実態調査 事業所における介護労働実態調査 結果報告書」より作成

図2 学生が魅力と考える介護の仕事

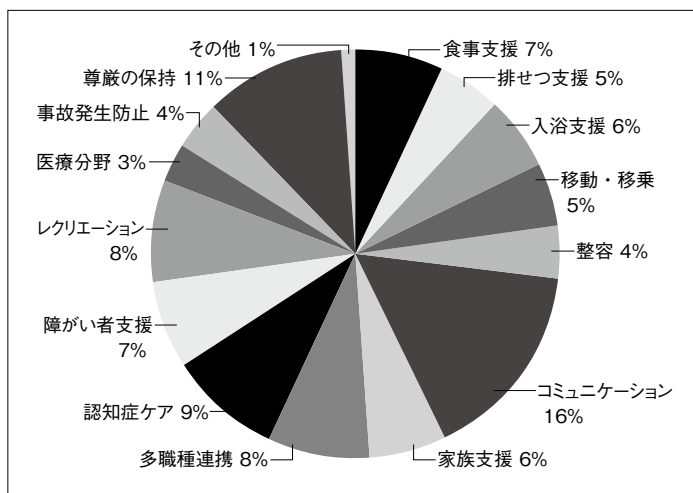
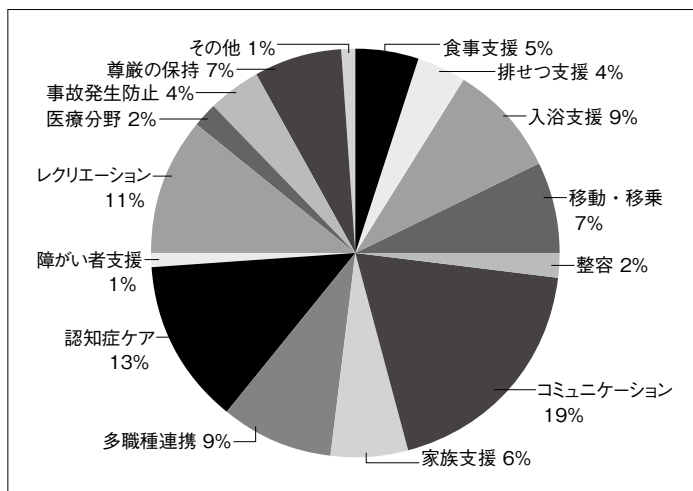


図3 職員が魅力と考える介護の仕事



合計491名で、そのうち介護の仕事を経験した小学生は3年生28名(男子3名、女子25名)、4年生28名(男子7名、女子21名)の合計56名となった。警察官、消防士、販売員等、合計31社の団体が職業体験を同時に開催するなか、介護の仕事は希望者も多く、イベント参加の11%の小学生に介護職の仕事を体験してもらうことができた。慣れない介助や声がけを経験してもらう小学生に対し、「仕事を通じて相手に感謝される経験をしてもらう」を目的に、高齢者に扮した職員は介助を受けた後は必ず感謝の気持ちを小学生に伝えた。その結果、体験した小学生からは「楽しかった」「ありがとうと言ってもらえて嬉しかった」という感想が多く聞かれた。また、子どもが介護職を経験している姿を熱心に見ている保護者も多く見受けられた。

仕事を体験する前の説明段階で、「おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしていますか」や「お話したこと(関わったこと)はありますか」といったインタビュー調査を実施した結果、体験した小学生すべてが「一緒に暮らしていない」「近くに住んでいるがたまにしか会わない」という回答であった。

4. 地域の方が抱く介護職のイメージ

介護ブースを出展した日の福祉イベント来場者は合計75名で、介護ブースに来場した方は37名となった。未就学児から高齢者までの幅広い年代の方の来場があったが、大型書店という会場のためか、子ども連れの夫婦や友達同士で足を運ぶ学生の姿が目立っていた。体験コーナーでは車いすに乗ることを恥ずかしがる方もいたが、B市のご当地キャラクターの協力もありブースに興味を示す方が多く見受けられた。

「介護職の魅力の木」で記入された介護職のイメージを類似カテゴリー別に分類分けした結果、プラスイメージでは「笑顔になる・もらえる」が最も多く24%、次いで「優しさ・思いやり」13%、「かっこいい・すごい」10%、「感謝される」「楽しそう」8%、「元気を届ける」「成長できる」4%、「必要な仕事」3%、「その他」14%であった(図4)。マイナスイメージでは「大変そう」が最も多く53%、次いで「腰痛」13%、「ストレスが溜まりそう」10%、「会話が難しそう」「給料が安い」6%、「きたない」3%、「その他」9%となった(プラス、マイナスイメージともに、記入、またはイメージできない未就学児はイラスト記入で対応したため、カテゴリー別では「その他」へ分類)(図5)。来場者からは、「マイナスイメージは出てくるがプラスイメージが思いつかない」といった声も聞かれていた。プラスイメージを連想できない場合は、マイナスをプラスに発想転換できるようなヒント(介護職のイメージは、と問わず、魅力ややりがいについてどう感じますか、等)を伝えて想像を促した(図6)。

IV | 考察

1. 介護職の魅力を効果的に発信する方法

地域における介護職のプラスイメージは「笑顔」や「思いやり」であり、学生が介護職の魅力と考える「コミュニケーション」や「生活支援」と統合すると、介護職は利用者と笑顔で関わり生活を支援する印象が形成されていると考える。日本介護福祉士会による「介護の仕事の社会的な意義と魅力」の整理とイメージアップ戦略のあり方についての調査研究報告書によると、6割超の人が「経験と知識、技術及びコミュニケーション能力等の総

合力が必要な高度な専門職・プロフェッショナルである」ことを介護職の魅力として社会に説明し訴えることができるという結果を示している。実際の介護現場で働く道南老健の職員が魅力と考えるのが「コミュニケーション」という結果になったことも、イメージと实际が結びついていることを裏付けている。

介護職という職業は生活支援から心理・社会的支援、医療的ケア等といった幅広い分野で構成されているが、イベント活動といった限られた時間内で魅力を伝達するには「興味を引く活動」と感謝されることに喜びを感じ、介護関係を通じて双方が笑顔になる「体験活動」が非常に有効であったと考える。

2. 現代社会と教育の理解

小学生に対するインタビュー調査結果では、高齢者との関わりが皆無といっても過言ではない程希薄な状態であった。高齢者を含む世帯の典型例とされてきた「三世代世帯」は1975(昭和50)年には54.4%であったが、2016(平成28)年には11.0%と大きく減少している。若狭は、「家族が生活単位であったときは、職業的な知識や技術が子どもに伝えられ、同時にそれは生活単位でもあるため、生活様式や価値も受け継がれた。しかし、

図4 介護職のプラスイメージ

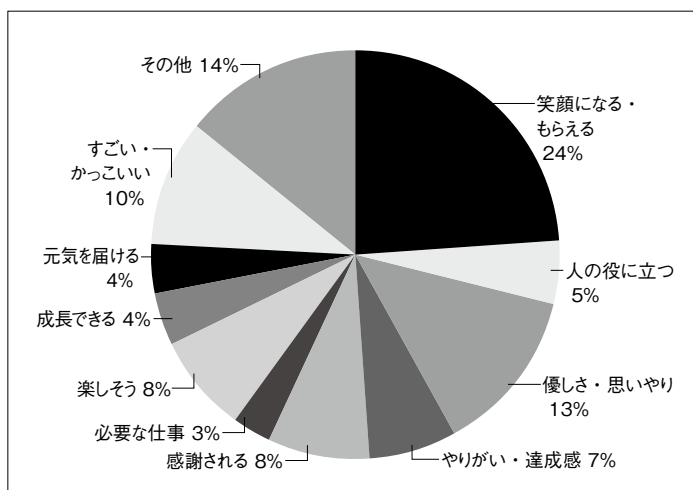


図5 介護職のマイナスイメージ

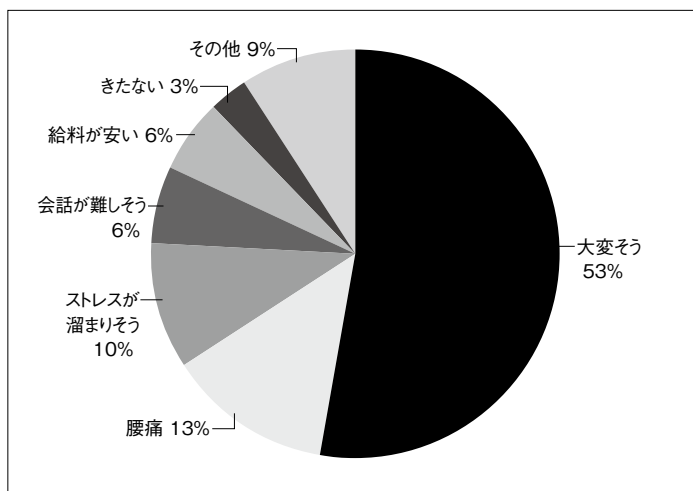


図6 作品「介護の仕事の魅力の木」



現在は職住分離によってそうした教育は難しく、教育機能は家族の外におかれている。」と述べている(若狭他 2018,pp.11-12)。老化に伴う心身機能の低下を、家族という関係性を通じて理解、体験する子どもは少子高齢化の影響に伴い今後も増加する見込みはないため、困っている人を助ける、お手伝いする、といった道徳的な気持ちを培う意味でも、介護職の体験は非常に有効的であると考ええる。

また、学生に対する体験活動を実施するには、学校教育の現状を理解しておく必要性がある。山下は、小学校における教科と指導方において「児童にとって1回の授業が「わかった」「できた」「楽しかった」ものでなければ、その後の学習意欲や学力にも影響する。」と述べており(山下他 2020,p.28)、中学校・高等学校における教科と指導法では池上が「アクティブ・ラーニング(AL)が求められる理由の一つとして、豊かな社会の到来により、子どもたちに学びの意味が見えなくなっている。テストで正解を答える力よりもコミュニケーション力や問題解決型の力が求められている。」と述べている(池上他 2020,p.43)。

これらの視点を踏まえた介護職の体験活動を通じた「楽しかった」というイメージは、介護職に対する興味関心に繋がると同時に、小学生の潜在的な記憶として残り、中学生・高校生の将来の職業選択肢の幅が広がる可能性を示すものと考ええる。さらに、研究結果から考察すると、現在の学校教育で求められる学びは、「介護福祉」という職業から得られることが非常に多く、介護職の魅力を発信することは社会的意義を含むものであった。

3. 介護職の魅力を阻害する要因

作品作りから得られた結果からも明確で

あった介護職のマイナスイメージは、地域においても根強く浸透しており、「腰痛」「ストレスが溜まりそう」「会話が難しそう」を総合しても「大変そう」な職業であることが先行している。マイナスイメージが先行する要因として考えられるのは、日本介護福祉士の「「介護の仕事の社会的な意義と魅力」の整理とイメージアップ戦略のあり方についての調査研究報告書」にある「世間が介護の機能や中身をよく分かっていない」や「マスコミの報道姿勢」等の理由があげられる。「介護職は大変」という事実は完全に否定できないが、イメージに翻弄され、専門職としての魅力が希薄化しているのも事実である。

本調査ではA市を中心とした地域に向けた魅力発信が一つのテーマとなっていたが、研究内容である研修会と2つのイベント活動は道南においては全てが初めての試みであった。そのことから、介護職の魅力を発信する活動件数が少なく、地域、そして介護人材確保に重要な多様な世代への理解が得られづらい状況が構成されていると考える。益川らが「ポジティブなイメージと動機付けの醸成」を課題としているよう(益川他 2017)、福祉サービスの充実・向上の中核的な役割を担う介護福祉士が、その専門性を発揮し、地域に介護職の魅力を発信していく必要がある。

V | 結論と課題

介護職の魅力を発信するには、社会の変化と学校教育を把握したうえでの「体験活動」が有効的で、多様な介護業務を理解してもらうには、対人援助者としての基本となるコミュニケーションを通じて「感謝の気持ち」を体験してもらうことが効果的であることが明確となった。

和田、佐々木は「幼児期・児童期は喜びや驚きの感動が多かったのに対し、青年期は友達と何かをやり遂げたことなど人との関わりの中での感動が多かった。したがって、幼い頃は褒められて嬉しかった経験や初めての体験が感動体験として記憶に残るが、中学生以降になると、友達と同じ体験をして満たされた気持ちを共有したいという感動へと感動体験の記憶は移り変わっていくのである。」と感動の体験がもたらす記憶について述べている(和田、佐々木 2014)。これらからも、本研究で実践した小学生に対する体験活動、高校生以上に対するグループワークや作品作りは、介護の魅力を「記憶」として残す方法としても有効的であったといえる。

本研究では「中学生」に着目した調査や、「高校生」を含めた対象に対する量的研究が不足していた点が考えられるため、介護職の魅力発信に向けた研究を継続的に実施し、さらなる有効的な活動方法を探求していくこととする。

しかしながら、本研究の体験活動による調査期間を経た2020年からは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大が顕著であり、3密の回避(密集・密接・密閉)を含めた飛沫感染や接触感染を予防することが日常生活においても非常に重要となっている。本研究の体験活動においても3密の発生が懸念されるため、感染防止の視点から如何に介護職の魅力を発信していけるかが新たな課題としてあげられる。だが、介護福祉の現場において、介護職は利用者の命を守るために感染対策に日々尽力し、誇りをもって日常生活を支援する専門的な職業であることを伝えていきたいのは明確である。

謝辞

本研究に協力していただいた介護リーダー会や道南老健の職員、学生の皆様、ならびにイベント関係者やA市、B市の職員の皆様に深く感謝申し上げます。

◎ 参考文献

函館市保健福祉部介護保険課(2017)「介護人材の確保・定着に関する実態調査報告書」(平成31年3月13日取得,
<https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2018011500035/files/houkokusyo.pdf#search=%27%E4%BB%8B%E8%AD%B7+%E4%BA%BA%E6%9D%90%E4%B8%8D%E8%B6%B3+%E5%87%BD%E9%A4%A8%E5%B8%82%27>).

厚生労働省(2018)「介護人材確保に向けた取り組み」(令和1年5月15日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_02977.html).

文部科学省(2008)「体験活動の教育的意義」(令和1年7月19日取得,https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm).

公益財団法人 介護労働安定センター(2018)「平成30年度介護労働実態調査 事業所における介護労働実態調査 結果報告書」(令和1年5月27日取得,http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/2019_chousa_jigyousho_chousahyou.pdf).

公益社団法人日本介護福祉士会(2015)「「介護の仕事の社会的な意義と魅力」の整理とイメージアップ戦略のあり方についての調査研究報告書」(令和1年12月2日取得,

www.jaccw.or.jp/pdf/chosakenkyu/H26/H26_hokoku.pdf).

若狭重克(2018)「第1章 現代社会の変化と社会福祉」, 鈴木幸雄編『改訂 現代の社会福祉』中央法規(pp.11-12).

山下敦子(2020)「第4章 小学校における教科と指導方」, 武安宥監修・塩見剛一・成山文夫・西本望・光成研一郎編『教育のアイデア 教職・保育士を志す人のために改訂版』昭和堂(p.28).

池上徹(2020)「第5章 中学校・高等学校における教科と指導方」武安宥監修, 塩見剛一・成山文夫・西本望・光成研一郎編『教育のアイデア 教職・保育士を志す人のために 改訂版』昭和堂(p.43).

益川順子・倉田郁也・前島克美・川延宗之(2017)「介護職の職業イメージに関する社会学的考察と介護福祉教育の役割」『文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.18』.

和田真江・佐々木宏之(2014)「感動体験がおよぼす大きな力ー幼児期から短大までの感動についてー」新潟中央短期大学紀要暁星論叢 64号.

厚生労働省(2020)「新型コロナウイルス感染症について」(令和2年7月2日取得,https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001_old.html).